〈史料紹介〉

アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（13）

谷　口　淳　一　編

はじめに

本稿は，アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー（Aḥmad Ibn Faḍl Allāh al-‘Umarī）著『高貴なる用語の解説』（*al-Ta‘rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf* 以下『高貴なる用語』と略）のアラビア語原典からの日本語訳注である。本稿では，al-Droubi の校訂本294頁１行目から307頁６行目までのテキストに対する訳注を掲載する。著者および本書などに関しては，訳注（１）の「はじめに」を参照されたい。

今回訳出した部分は，第７章第１節の第１項と第２項に相当する。本章には，さまざまな事物について，サジュウ体という押韻散文の例が多数収められている。「書簡の中でよく述べられる，用いるべき形容辞」という章題から，これらの文は，マムルーク朝政府の書記たちが文書を作成する際に参照することを想定した範例と考えられる。本訳注で「書簡」と訳しているアラビア語は「手紙をやり取りすること」という意味をもつ mukātaba で，『高貴なる用語』の第１章には，おもにカリフや各地のナーイブ（総督）など国内の有力者および国外の王や大臣宛にマムルーク朝スルターンから送られた書簡の例が収められている。それらのほとんどは書簡冒頭部分の例であるが，本章の文例と同じような複雑な修飾や比喩をちりばめたサジュウ体の文で構成されている［訳注（１）－（３）］。

このような修辞に満ちた文は，上記の「書簡」以外の文書にも用いられた。委任状や任命書の中の本文に相当する指示部分（waṣīya）は，具体的な指示内容が中心ではあるが，その中にもところどころに手の込んだ表現や比喩が配されている。たとえば，本章第２項では投石機の攻撃に対峙する城塞がベールで顔を隠した女性に喩えられているが［本稿：*53*頁］，「城塞のナーイブに対する指示部分」にも同様の比喩がみられる［訳注（４）：*43*－*45*頁］。

本章には，このような文例が対象となる事物ごとにまとめられ，分類されて収められている。第１節は種々の道具に関する文例を集めた節であり，そのうち本稿の訳出範囲である第１項には武器，第２項には攻城兵器に関する文例がそれぞれ収録されている。第１項に収められているのは，剣，槍，タバルズィーン（戦斧），短刀，弓，箙と矢，弾弓，弾丸袋と弾丸，戦棍（槌矛），杖，兜，鎧，盾という対人戦闘に用いる13種の武器・武具を表現した文例である。このうち矢と弾弓用弾丸は，それぞれの容器も描写の対象となっている。続いて第２項には，投石機，ズィヤール（架台付き弩），防御柵，ヒタイの矢，弩砲，火炎瓶という攻城戦に関わる６種の兵器を描写した文例が収められている。

これらの文例は，もってまわった表現を用いて事物を描写するための範例なので，対象となった武器や兵器の実際の形状や使用方法について具体的な情報を得る史料としては利用しにくい。しかしながら，このような表現や比喩がマムルーク朝政府が発行する公式文書に用いられたということを考えれば，ウマリーが示した文例は，バフリー・マムルーク朝時代の官僚や知識人のものの見方や考え方を知る手掛かりにはなるだろう。

また，各例の中には，クルアーンやハディース，詩歌などの一節を踏まえた部分もみられる。ほとんどの場合，一部の語が他の語に置き換えられたり，語順が変えられたりしており，原文がそのまま用いられることは少ない。そのような箇所については，al-Droubi が原典の情報を掲げており，我々もおおいに参考にした［研究篇：282－285頁］。ただし，本訳注公刊に際しては，クルアーン以外の著作や詩を踏まえた表現については，とくに重要であると思われるものに限定して原典などの情報を注に提示した。本訳注に提示されていない原典情報については，al-Droubi 1992の研究篇を参照されたい。クルアーンの文言については，原文がそのまま引用されている場合はもちろんのこと，一部を変更して用いられている場合でも出典を注記している。

我々は，2003年７月から「イスラーム世界における書記とその伝統研究会」と称して，１年間に10回程度の研究例会（輪読会）を開催し，『高貴なる用語』を読み進めてきた。今回の公刊部分は，2021年４月から2022年４月にかけて実施した計11回の例会（第189回～第199回）で読んだ部分に相当する。この期間の研究例会で訳注作成を担当したのは，伊藤隆郎，岡本恵，近藤真美，杉山雅樹，辻大地，三橋咲歩，森山央朗，柳谷あゆみ，横内吾郎（五十音順）と谷口の10名であるが，さらに篠田知暁が編集作業に携わった。各担当者が作成した訳注を例会で検討し，その修正案を元に全体の原稿を作成した。訳語や表記の統一と最終的な調整および「はじめに」の執筆は谷口が担当した。

訳文中にある〔　〕は，校訂本およびその底本であるＬ写本の頁の表示と，校訂本に無い語句を補って訳した場合に用いた。また，用語の原語をローマ字で表記する際には，原則として辞書の見出しとなる形（アラビア語の名詞と形容詞は単数形主格，動詞は完了形３人称男性単数）に直して示した。ただし，章節題などの表示，単数形にすると意味が変わってしまう語句などは，原文の形に即して転写した。

なお，我々の研究会は，2018年度より科学研究費助成事業基盤研究（Ｂ）（一般）「13－15世紀におけるアラビア語文化圏再編の文献学的研究」（代表者佐藤健太郎，課題番号18H00719）の一研究班として活動しており，本稿はその研究成果の一部でもある。

『高貴なる用語の解説』(13)

アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー

〔txt. 294; ms. 127b〕

第7章　書簡の中でよく述べられる，用いるべき形容辞

本章は7節より成る。

第1節　道具およびそれに準じるものとして分類されるもの

第2節　動物

第3節　場所

第4節　水およびそれに関するもの〔ms. 128a〕

第5節　天体

第6節　時

第7節　荒天

〔txt. 295〕

第1節　道具[1)]

複数の項〔から成る。〕

第1項　武器[2)]

剣[3)]

彼は以下のごとき剣を振るった。すなわち，その剣の裁きは首に落ち，子孫にまで及ぶことがらを人に宣告する。剣の振るい手は真剣であり，剣身で痛みを受ける。また，戦にいそしむ中では，振るわれた剣が敵に迫って痛みを与え，ただ首をのみ落とす。その剣の下では，編まれた鎖鎧も隠された卵〔のごとき兜〕[4)]も〔その剣の攻撃を〕阻むことはない。剣は炎を放ち，輝く刃（firind）は流れるごとくに上下する。その剣はたとえ抜かずとも，今にも鞘を食い破り，剣帯までも切らんばかりである。その持ち手は雷光の息子[5)]を帯び，その煌め

1）　al-ālāt.
2）　al-silāḥ.
3）　al-sayf.
4）　bayḍ maknūn. この表現は，『クルアーン』37章49節に登場し，親鳥の羽毛によって砂埃から守られたダチョウの卵がもつ，やや黄色味を帯びた白色が，天国の乙女の肌色を示すと，概ね説明される［*Tafsīr al-Ǧalālayn*: 447］。本文において，bayḍ にそのような意味はなく，形状がダチョウの卵と似ていることから，兜を意味する（通常は bayḍa）。直前の句，zard mawḍūn（編まれた鎖鎧）と韻律を整えるために，『クルアーン』にあるこの表現が用いられたのではないかと思われる。同時に，攻撃を逃れようとして敵が盾に隠れている様子を表しているのであろう［*Lane*: 282; “silāḥ,” EI2］。
5）　ibn ṣāʻiqa. カルカシャンディーによれば，落雷によりできた鉄によって造られた剣のこと

きごとに死の時を見せる。彼は深淵に彼の業火〔たる剣〕を投げつけ，死の時をもたらすことを彼の使い〔たる剣〕に許す。その剣は，身に蛇皮をまとっているか，一切れの雲にくるまれているがごとし[6]。剣を振り下ろす者が剣から〔たなびく〕白雲の尾を引き，敵を怯えさせれば，敵は，剣という吠える獅子の，その刃が〔身に〕振り下ろされることをこそ恐れた。そして剣を振るう者は，剣のために引き出されたあらゆる者に剣を携えて近づいて，緑の黒鉄の刃という支援によって，熟した戦果を刈り取った。〔txt. 296〕

彼は以下のごとき剣を振るった。すなわち，剣の〔流す〕唾液に死の運命が溶け出し，死が皮膚のごとく剣にまとわりついた。剣が瞼を塞いでその刃が眠っているようにみえても〔ms. 128b〕安らかに眠っていることはなく，心臓に次々と突進して戻ることはなかった。殺された者のために剣が泣いているようにみえても，その涙とは血が流れているのであり，無事だった者の眼前では剣が燃え上がり，その者は肋骨に火がついた〔かのように心が痛み〕，目頭には水が溢れた。

槍[7]

彼は，節間のまっすぐな柄を槍のために用意し，操られる〔槍〕を携えた〔槍を〕操る者は真剣である。彼は，槍という牙で噛み砕かんばかりに奮戦し，槍という綱で張られた〔敵の〕死という天幕は確固としたものとなる。節のある槍で血を流し，騎士の襟首を捉える。槍によって益を守り，槍先で数え切れないほどの魂を拾い集める。雲間を横切る稲妻は，自分が槍の形をしていたらと願うであろうし，天空の十二宮の連なりは，槍の胸壁に囲まれていたらと望むであろう。また，親しい者たちは槍の笑う歯に吉兆を認め，敵は回転する槍の節間に凶兆を認める。槍の一突きごとに，開いた傷口から〔血の〕川が流れ出るのが見え，〔その血の〕一滴ごとに青き目をした敵[8]の緑の[9]樹に火がつくのが見える。一振りするごとに槍（asal）には死が用意され，槍には〔敵が〕突き刺す場所は見当たらず，突き刺す者にとってはあらゆる〔攻撃の〕道がそこにある。〔txt. 297〕

タバルズィーン，すなわち戦斧[10]

タバルズィーン，すなわち戦斧〔は，それ〕をもち，我らの鐙の前を歩く者しかいないが，情報のない〔タバルズィーンがどのようなものであるか〕が目の前に示された。それは両側

［*Ṣubḥ*, v. 2: 139］。

6） 剣を，蛇のような恐ろしいもの，また雷雲の中の稲妻に例えているのであろう。

7） al-rumḥ.

8）「青き目をした敵」と訳した部分の原語は azraq である。この語の語義は「青い」であるが，ここでは目の青い者を示している。すなわち，アラブ人と敵対していたことのあるギリシア人やダイラム人の多くが青い目をしていたことから，根深く対立している者のことを指している。同時に，『クルアーン』20章102節にあるように，彼らが恐怖や苦痛に青ざめていることも示している［*Lane*: 1228; “lawn,” EI2］。訳注（3）*26*頁注49および本訳*53*頁も参照せよ。

9） 校訂テキストでは，al-aḫḍar（緑の）の ḍāl が欠けているが，L 写本（底本）を含む諸写本に従って修正して読んだ。

10） al-ṭabarzīn wa huwa al-ṭabar.

に刃がつけられ，その使い方は，戦斧を頭につけた戦棍（dabbūs）のようである。鞘から抜かれると，それは噴き出す泉と言われる。持ち手はそれで襲うときに，望めば，殺し，血を流すことができ，また望めば，粉砕することもできる。

短刀[11)]

短刀はその舌を小刻みに動かし，粗い先を〔相手の血で〕滑らかにし始めた。輝く刃は縞を描き〔ms. 129a〕，鍔（šanbar）は壁を築いた。夜の帳がその輝かしい朝を際立たせ，蒼い切っ先（ḥadīd）が白い刀身（ǧawhar）から血で赤い紅玉になるものをうち出した。困難なときに持ち手を助けた。それを敵の喉元につきつけたときは，それは兄弟，その片割れのよう〔に頼もしい〕。

弓[12)]

定めの時，新月の始まりが弓を背負い，勇者たちは，その影を探した。〔txt. 298〕弓から出た大魚が鎖鎧の池を貫き，敵の乙女らには運命〔の知らせ〕が送られる[13)]。弓は唸り，その病は治しようがなく，それが届くことのできる距離は剣よりも遠い。箙から矢をそそぎ，死の沼地に足を踏ん張った。射手はしっかりと弓をつかみ，殺すか，または血を流した。弓がもたらす悲嘆で何人の敵を死なせ，弓から射ったもので敵の心臓からどれほど血を吐かせたことか。親指の影を離れる[14)]間もなく，獲物をしとめた。弓は勝利を剣と分け合ったが，弓の方が剣に対して矢張り分け前が多かった。

彼は彼の弓を持ち出した，弓を握る拳に魂を込めて。弓の刹那のきらめきに稲妻が宿る。矢については，弓が鏃を軌跡を引いて飛ばして，弓弦については，それを離すことで弓が〔人を〕脅かすことはもはやない。弓が水車の円環の半分，あるいは，「定め」の「め」の字のはらいの部分[15)]のようだから。弓の餓えが満たされることはなく，弓の不安が払われることもない。〔弓は，〕与え，禁じ，恵み，奪い，辛抱強く，後悔を知らない[16)]。脚[17)]があって進むものだが，足（qadam）で歩むことはない。飛ぶものであるが，翼はない。〔ms. 129b〕沈むもの[18)]であるが，その星々の沈んだ上（後）に朝日が昇ることはない。見る者が丘〔に

11）al-sikkīn.
12）al-qaws.
13）「送られる」と訳した動詞は，校訂テキストでは tursalu（未完了 3 人称女性単数）となっているが，このままでは主語である「運命」（男性名詞単数）と対応しない。そこで，D1写本［f. 186a］に従い yursalu（未完了 3 人称男性単数）と読んだ。校訂298頁注 1 を参照。
14）「離れる」と訳した動詞は，校訂テキストでは farāqat となっているが，誤植であろう。諸写本に従って，fāraqat と読んだ。
15）ta‘rīqat nūn al-manūn. 直訳は「定めのヌーンの湾曲部」［*Dozy*, v. 2 : 121］。
16）アラブの詩人，al-Namir（Namr）b. Tawlab al-‘Uklī（644年以前に没）が，弓について詠んだ次の詩句を踏まえた文章。fī kaffi-hi mu‘ṭīyatun manū‘u, mūṯaqatun ṣābiratun ǧazū‘u（彼の掌のなかで，〔弓は〕与え，禁じ，結ばれ，辛抱し，安らがない）［*Bayān*, v. 1 : 149-150］。
17）riǧl. 人間や動物の脚を意味し，riǧl al-qaws（弓の脚）で，弓の下半分を意味する［*Lane*: 1044］。
18）ġā’ir. この単語には「侵徹する」という意味もある。

登ること〕を必要としない新月である[19]。〔矢は〕放たれるや標的まで一瞬[20]。〔txt. 299〕

箙と矢[21]

矢とともに，箙によって，あらゆる連射，すなわち，途切れることなく矢を射かけるようにした。箙から優れた矢を取り出せば，箙の中で矢は既に矢柄まで研がれて，翼を持つものたちが狩らないものを狩るために矢羽根がつけられていた。鏃は，弓の強さと，弦の強靱さ，研ぎ澄まされたきらめき，恐るべき攻撃，それら全てをともない，当たったところに死をもたらす。剣が矢を浸す洪水となって溢れると，矢が渇きを潤す。矢は届く。仮に槍が長く伸びたなら，槍を抱えた者が，捉えたであろうものへと。あるいは，剣の届く範囲にいれば，剣を振るい，それを磨く者が討ち取り，捕らえたであろうものへも。矢の掩体は，土埃が消えても暴かれることはない。騎兵が矢に対して鎧を着たとしても，矢が対抗できないわけではない。試練が課され，裁きは下される。〔運命の〕時が来た者は速やかに死に[22]，損害は明らか。そのため，箙が〔早く矢を補充しろと〕不平を言い続けるのである。

弾弓[23]

その弾丸はジュラーヒク[24]とも呼ばれる。

弾丸は鳥の急所へ向かって飛んでいく。〔弾丸を放つ〕弾弓は，必ず死をもって襲いかかり，的中させる。弾弓は絹に身を包み，色鮮やかな布で巻かれている。また，それは春の服のごときものを身にまとい，驚くべき美がその上に現れた色とりどりの鳥の羽毛を奪う。弾弓の頭はたわめられ，〔その姿は〕まるでこめかみに垂れた巻髪のようなジームの文字の形をしている。〔txt. 300〕またその入れ物は飾りたてられ，〔その美しさは〕まるで天から美しい染料について教わったかのようである。弾弓は，鳥やその類のものを〔撃ち落さんと〕欲して弦を張られ，その上には咎められるべき女性たち[25]であるかのようにイザール[26]がかけられている[27]。それというのも，〔ms. 130a〕美しさにとって，それを晒すことは好ましくないからである。弾弓は弾丸によって〔獲物に〕致命傷を負わせ，その射程から鳥を撃ち落

19） hilālun lā ya‘ūzu rābīyatan baṣīrun. ベイルート版［266頁］では，hilālun lā yu‘awwizu rā’iya-hu bi-ṣayrin（昇ったときに，それを見るものを必要としない新月）となっている。
20） fitrun ḍāqa bi-marāmī-hi ‘an masīrin. 直訳は「発してからその標的までにおいて間隙は狭い」。
21） al-kanā’in wa al-sihām.
22） ḥatfun ‘āǧilun lā yalqā-hu illā ḥā’inun. 直訳は「死す者だけがそれに遭遇する速やかな死」。
23） qaws al-bunduq. 弩あるいはクロスボウの一種［訳注（6）：*67*頁注15］。
24） ǧulāhiq. bunduq と同義であり，弾弓に用いられた素焼きの粘土やガラス，金属製の弾丸のことを指す［研究篇：283頁；“Ḳaws,” EI2; *Dozy*, v. 1: 118］。
25） mudānāt. これを danā のⅢ形動名詞 mudāna の複数形と考えた場合，「近づく者たち」と解釈するともできる。
26） izār. 一般には，メッカ巡礼の際の衣服としても用いられ，腰布にも羽織にもなる巻き布を指すが，エジプトでは女性が頭，顔，身体の後ろ部分を隠すために用いる，地面を引きずるほど長い覆い布を指すこともあった。ここでは後者の形態を指す。［Dozy 1845: 24-29］。
27） 本文では，いつでも射る用意ができている弓の上に布がかけられ保管されている状態を，女性が覆い布（イザール）を被っている様子と掛けて表現していると解釈した。ただし，前掲注25の通り mudānāt を「近づく者たち」と解釈した場合，射手がイザール（幕）の後ろに身を隠しながら射ようとしているとも解釈できる。

とした。翼のついた，血の香りの染みついたあらゆるものは，朝に夕に射手の手に入る。〔射手が立っている〕その場所から弾丸を弦に取り付けて弓を引き絞ると，弾丸は唸りを上げ〔て飛ぶが〕，痛みを訴える者のために嘆き悲しむことはない。それによって群れ成す鳥が射落とされるのである[28]。また，空を右へ左へと飛び交うあらゆるものを捕らえようとするとき，弾弓は〔必ずや狙いを定めた獲物を打ち落とすという〕誓いを守る[29]。笊で水をすくうようなものではないのである。

弾丸袋と弾丸[30]

弾丸とともにある弾丸袋は，まるで星々〔が昇ってくる〕地平線や，あるいは矢を入れる箙のようであり，弾丸袋から現れた〔弾丸〕によって，昇っていく鳥は撃ち落とされ続ける。それが上昇して現れた時，その鳥の血が流れる。星が沈むとそこからまた星が現れる〔ように〕[31]。それに狙いを定められたものは，弾丸によって死に，射手は〔撃ち落そうと〕したものを奪い取る。ただし，射手は弾丸袋ではなく弾丸と革や腱の力によるものではない弓で射かけるのである。

槌矛，すなわち戦棍[32]

そして，戦場がいよいよ狭まり，剣が人々の寿命を断つことに倦んだ[33]。足元から槌矛を抜くと，そびえ立つ建物は崩れ落ち，騎兵は〔馬から〕落ちる[34]。それらは「張り広げられた列柱（‘amad）の中で」［クルアーン：104章9節］〔燃え落ちる〕材木のようなもの。それは鉄で覆われ，振り下ろされた場所は揺れ動く。槌矛が布（šāš）であるならば，それは勇者の頭に巻かれる[35]。それによって殺された者は死に，真っ二つとはならないまでもまさに背骨が砕かれんとする最中，怯える鼓動だけがある。〔txt. 301〕戦闘において〔槌矛を〕振るう者は剣による恐怖から安全である。槌矛を突きつけると，〔相手の剣の〕吊革は〔その持ち主〕を守ってはくれないし，〔剣の〕鞘は近づく槌矛を遠ざけてはくれない。その音を少し立てるだけで，勇者たちは沈黙し，その剣は歯が立たない。それが振り下ろされた時，

28）『クルアーン』105章3節の「そして，彼は彼らに対し鳥の群れ（abābīl）を遣わされた」を踏まえた表現。

29）7世紀頃に活躍した詩人カーブ・ブン・ズハイルの作品の一節を踏まえた表現［研究篇：283－284頁；“Ka‘b b. Zuhayr,” EI2］。

30）al-ğirāwa wa al-bunduq. ğirāwa とは弾弓に用いる弾丸を入れる革袋である［研究篇：284頁；*Ṣubḥ*, v. 2: 145］。

31）7世紀に活躍したアラブの詩人であるアブー・アッタマハーン・カイニーの作品の一節を踏まえた表現［研究篇：284頁；“Abu ’l-Ṭamaḥān al-Ḳaynī,” EI2］。

32）al-‘āmūd wa huwa al-dabbūs.

33）遠方に向けて攻撃する矢などの武器を使うことができない白兵戦の状況で，また，刃の欠けや血糊の付着によって剣が十分に威力を発揮することができない場面を表すと考えられる。

34）ここでは「槌矛」は ‘amūd と表記されているが，この語は「柱」の意味も持つ。直後のクルアーンの引用も含め，それら両方の意味を掛けた表現になっている。

35）‘ummima bi-hi ra’su al-ṣindīdi.「剣で頭（ターバンを巻く箇所）に一撃をくらわせる」（‘ammama-hu bi-al-sayfi）という表現［*Lane*: 2148］を踏まえ，布の巻かれる位置である頭部に槌矛が振り下ろされることを比喩的に示していると考えられる。

死者の頭には，あたかも「曙光（‘amūd）がさして夜が明ける」[36]かのようなものだけ[37]が見える。〔ms. 130b〕

兜も鎧も槌矛を防ぐことはできない。またそれは，剣や矢の稲光を恐れることもない。それによって，堅強な背骨は硝子が割れるように粉々に砕け，兜の鉢は鶏の卵のように割れる。

杖[38]

それを担ぐのは容易く，肩から下ろす必要がない。邪魔者を取り除くためにはこれだけで十分である。モーセの手を白くしたような，彼の徴の如く杖は用いられ[39]，どのような望みも自在に行うことができる。〔モーセは〕立ち止まる時にはそれに寄り掛かり，彼の率いる一団の足並みが揃わない時にはそれを掲げてまとめあげていたのである。そして何よりもそれは敵対者の首筋に一撃を加えるのに用いられる。杖によって敵を抑えつけることには，他にも様々な有用な点がある。すなわち敵が拒む場合には，彼らの頑なさを和らげることができる。また競うことにおいては，彼らが作ったものを杖によって呑み込む[40]のである。

兜[41]

彼はその継ぎ目の白さ（bayāḍ mafriqi-hi）によって飾られた兜をかぶり，地平線に上る満月のごとく現れた。彼はまるで炎を身にまとったかのごとくにそれをかぶってやってきて，それはまるで金が触れた銀のごとくに〔金色に輝いて〕太陽の光線を反射した。それをかぶった彼に対して，一突きたりとも剣が打つ余地はなく，その上には砂煙が天幕を張ることはない。その名高い堅固さは語り草である。〔txt. 302〕縁の鋼〔に当たること〕を望まぬ者は〔兜の下に〕クーフィーヤ[42]を着用する。兜は，自らがそれをかぶった頭の身代わりとなり，敵から守り続けることになる。

鎧[43]

彼は〔全身を覆うほど〕長い鎧を着て前進した。その鎧は〔鎖の〕目が詰まっており，そ

36） 研究篇に言及はないが，アッバース朝期の詩人アブー・タンマームの詩の一節を踏まえた表現だと思われる［*Dīwān Abī Tammām*, v. 1: 413］。ここでも光の柱である「曙光（‘amūd）」［*Lane*: 2153］が槌矛に見立てられている。前掲注34も参照のこと。

37） 校訂テキストでは kallā（まったく…ない）とあるが，諸写本並びにベイルート版［268頁］に従って illā（［否定を伴い］…だけ）と読んだ。

38） ‘aṣā.

39） 『クルアーン』７章，10章，20章，26章，28章などに見られる，モーセの奇跡の徴に関する記述を踏まえた表現（『旧約聖書』では「出エジプト記」４章，７章）。奇跡の徴の一つとして，モーセが投げた杖が，蛇になったことが挙げられている。

40） 『クルアーン』における，ファラオの命によって集められた魔術師と競い合う場面での一節を踏まえた表現［クルアーン：７章117節，20章69節，26章45節］。当該箇所ではモーセが，魔術によって生み出された蛇を，杖を投げることによって封じている。『旧約聖書』では，魔術師たちが秘術によって杖を蛇に変えるが，モーセとともにいたアロンが投げた杖が大蛇になり，それらを呑み込んだとある［聖書：出エジプト記７章８－13節］。

41） al-bayḍa.

42） kūfīya. 男女がともに着用した帽子の一種。リボンまたはスカーフが垂れ下がり，貴石などで装飾が施された。ファーティマ朝後期から史料に言及が見られる［Stillman 2000: 81］。現代のアラブ諸国でクーフィーヤないしカーフィーヤ（kāfīya）と呼ばれる頭に被る薄手の布とは異なる。

43） al-dir‘.

の目は死という運命を嫌悪して見つめ，その〔鎖の〕目は幾本もの川のようにとめどなく続いた。それは戦闘に火をつけ，〔ms. 131a〕細めたその瞳を土埃で彩り，その鉄の輪で勇気の扉を叩く。太陽にその光線を跳ね返し，触るとその強さがわかる。〔鎧とは〕見せかけではない装甲であり，流れ出す必要のない大波である。その力は激しく，その視線は鋭い。その海は，そこを泳ぐ者によって波立つことはない。

剣がその鎧と出会っても，その縁で止まってしまう。槍の穂先がそれに話しかけても，それは見事に返してしまう。矢が降り注いでも，それはその閃光を消してしまい[44]，〔恐怖のあまり〕青い目をした槍を持った罪人たちを追い集める[45]。戦士たちの伝える話を聞いてやり，攻撃してくる者に対しては応じ，〔逆にその者が〕貫かれてしまう。〔txt. 303〕

盾[46]

彼は盾を手に持った。剣は盾にはね返されては何度も攻撃し続けたが，盾に驚くばかりであった。それは，あたかも死すべき時というものに抵抗するために作られたか，あるいは剣を振るう者が被る臆病という侮辱を取り除いてやるために作られたかのようである。盾の中で死〔をもたらす剣〕に火が点き燃えあがったかのようであり[47]，東方より太陽が昇ったかのようであった。それゆえ，太陽は黄金の盾と言われたのである。

第２項　攻城兵器[48]

投石機[49]

投石機は，都城[50]にこの後どうなるかを知らせ，門を閉ざしてどういう目に遭うかを思い知ることがないようにと警告した[51]。都城が拒絶するばかりで，結婚の約束を交わした身[52]でありながら防御柵という顔の覆い[53]を外すことを拒否した時，投石機は，帯を締め，戦うた

44）　校訂テキストでは la-hā（訳文の「その」に相当）が２度繰り返されているが，Ｌ写本並びにベイルート版［269頁］に従って重複部分は省いて読んだ。
45）『クルアーン』20章102節を踏まえた表現。前掲注８参照。
46）　al-turs. 盾のうち円形のもの（円盾）を意味する語。直径65－75cm 程度の木（合板）製が一般的であった［Nicolle 1982, v. 1: 229］。
47）　この部分は剣の攻撃を盾が防いでいる様子の比喩であろう。ウマリーが示す武器に関する形容辞では，剣は「炎を放つ」（tawaqqada šu‘alan）ものとされるだけでなく，それ自体が「業火」を連想させる「炎」（sa‘īr）として描かれている［本訳：*47－48*頁］。
48）　ālat al-ḥiṣār.
49）　al-manǧanīq. 弾丸を投擲する兵器の総称。ギリシア語由来の用語［“mandjanīḳ,” EI2］。
50）「都城」と訳した箇所は，原文では女性単数代名詞 hā となっている。ベイルート版はこの代名詞が「城塞」（al-qal‘a）を指すと解釈している［ベイルート版：270頁注２］。しかし，本訳では，この段落の最後に記されている al-madīna（都市）という語を指していると解釈し，文脈を踏まえて「都城」と訳出した。
51）「…がないようにと警告した」と訳出した部分は，校訂テキストやＬ写本（底本）では wa ḥaḏḏarat-hā illā an ...（警告した。しかし…）と下線部が逆接の接続句となっており，文意が取りにくい。そこで，Ｂ写本［f. 100a］およびD1写本［f. 189a］に従って，下線部を allā（an lā）（…しないこと）と読んで解釈した。
52）　al-‘aqīlat-hā al-maḫṭūba. 都城を婚約者に喩えて表現しているのであろう。
53）　min al-satā’iri qinā‘an. 防御柵（satā’ir）に関する修辞については後述される［本訳：*56*頁］。

めに裾をたくし上げ，都城へ向かって前進した。城塞〔を撃つ〕より前にそこに住む者の心臓を恐怖で撃ち，赤い血より前に都城の頬を恥で赤く染めた。投石機は，慎重に〔ms. 131b〕都城を狙い，一気にそこへ到来した。その雷鳴が響いたが，それは落下の轟音である[54]。投石機は任務として都城との戦いを遂行した。幕壁[55]に傷跡を付け，前進し，そして，その進路を妨げるものを残さなかった。投石機は城壁と言い争ったが，城壁は巧く反論できず，投石機は城壁と双六遊びに興じた[56]。疲弊した者は活力を取り戻し，双六に興じる者は喜んだ。そしてついに強奪された戦利品を取り戻し，勝利したが，それは〔txt. 304〕投石機が建てられ，弾丸[57]が都城を制圧したときのことであった。そして，城壁と稜堡[58]を根こそぎ破壊し，その都城（al-madīna）の姿を一変させた。一時が過ぎただけであったが，投石機の名声は終末の時まで残ることとなった。

我々は都城に対して，投石機を据え付けた。投石機は都城の城塞に競り勝たんとし，昼も終わらぬうちに，都城を根こそぎにし，城壁を破壊し，前門（ṯağr）を破砕し，川の流れもないのにその石組みを掘り崩し，都城を巡る者たち（sayyāra）を動揺させた。投石機は，国（balad）もその国の人も殲滅し，自らの舌が声高に発することをやり遂げた[59]。投石機は，準備万端整い手ごわく，その心は堅固で和らぐことはなかった。その広げた長い腕は短くならず，その手綱は伸びやかで短縮することがなかった。それらは，配置が整えられ，訓練も行き届き，さらに手を大きく広げ，天に迫って立ち向かう。腕力強健にして援け手にも恵まれる。その舌は叱りつけるかのように動き，その槍の穂先は書記の筆のように自在に動く。それは出自について文句のつけようのない気高き脚と，〔補助の〕張り綱などつけようもないほどしっかりとした縄を持つ。そしてそれはすでに死の沼地を自らの足で踏みしめ[60]，槍

なお，「顔の覆い」と訳した qinā‘ という語には「武器」という意味もある。

54） 弾丸が落下する音，あるいは弾丸発射時に外される錘の落下音か。

55） badanāt. sg. badan. 幕壁とは，城塞や都城を囲む防御施設のうち塔と塔の間の壁を指す語である。badan は「身体」「胴体」という意味の語であるが，*Dozy* には，さらに「袖無しの上着」「衣服の身頃」といった衣服関係の意味に加えて courtine という訳語が記されている。この語が「幕」という原義ではなく「幕壁」という意味の訳語であることについては，この語釈の典拠である *Ǧāmi‘ al-tawārīḫ/Quatremère* を参照のこと。*Dozy* が典拠としている頁には，テキスト中の badan の語に対する注があり，この語が幕壁の意味で用いられている例が多数の資料から引用され示されている［*Dozy*, v. 1: 59; *Ǧāmi‘ al-tawārīḫ/Quatremère*: 252-253, n. 81］。

56） 「双六遊びに興じた」とは攻撃側と籠城側の交戦の様子の比喩であろう。ここで「双六」と訳した nard は，現代の日本で一般的な絵双六ではなく，バックギャモンを意味する［“nard,” EI2］。そこで用いられるコマが，投石機から発射される弾丸ないし石を連想させるのかもしれない。

57） faṣṣ. この語は「宝石」「石」「サイコロ」などを意味する［*Lane*: 2403］。投石機の石ないし弾丸とバックギャモンで用いるサイコロの両方に通じる語として用いられているのであろう。

58） bāšūra. 稜堡（bastion）［*Dozy*, v. 1: 89］。

59） 「やり遂げた」と訳した語は，底本（L写本）には wātat と記述されているが，ベイルート版［271頁］の記述に拠って atat と読んだ。校訂304頁注10も参照せよ。

60） アブー・タンマームの詩句「そこで彼は死の沼地を足で踏みしめ／彼女に汝のすぐ足元に（最後の審判の）集まりの日はあると告げた」を踏まえた表現［研究篇：285頁］。

の森の中に自らの根を植えつけた。投石機は，〔ms. 132a〕まるで男のようで，施錠されたその箱の中に何があるのか判らず[61]，また，まるで〔人の〕行いのようで，その荷重のかかった秤の皿は軽くならない[62]。それは，戦場では〔どれだけあっても〕多いということはなく，それは杖や縄から彼らが作ったものを一呑みにしてしまう[63]と言っても過言ではない。投石機は鷲のようにつかみ上げ，雲のように伸びていき，雷鳴のように轟音をあげ，若き乙女のように姿を隠し〔たかと思うと〕，燃え上がるようにいきり立ち，解放されたように騒いだ[64]。〔txt. 305〕

そして投石機は，〔自分が〕最も栄光に満ちた者であるかのように睥睨し，臆病者であるかのように身をひるがえした。それは幕壁の外面に，〔幕壁が〕恥じらっているかのように〔赤らむ〕血しぶきを広がらせた。そして投石機は，子を失った者の傍らでうめき声を上げた。投石機は飢えていた。都城の城壁は嚙み砕かれ，そのなかには食べ残された残骸がある。投石機は，それらの胸壁（šurfa）に，都城の美点を消し去って，この場で隠れ場所まで追い詰めたと告げた。投石機ゆえに，石組みは恐怖のあまり総身を震わせ，城壁から見張り番はいなくなった。そして投石機は都城に深く入り，威容を誇る建物群に火を放ってそれらをばらばらにし，また長大なアーチ橋に火を放ってその繋ぎを解き[65]，速やかに都城を解体した。

投石機は，都城から城壁の囲いの帯を引き下ろし，釘で留められた胸元の首飾りを首から外した。そして神の支援を受けた軍団が，あらゆる場所から攻撃をしかけ，すでにそうであったかのような城壁の残骸に押し寄せながら，都城の内部へと入ってきた。その国の全体が支配され，旗が掲げられ，イスラームの呼びかけが聞かれるようになった。塔の頂に登ってアザーンが行われ，〔都城は〕明け渡された。そして投石機の作り手は力を得て，褒賞を受けるのである。

61）慣用句「男とは施錠された箱であり／それを開く鍵は試練のみである」を踏まえた表現。この言葉は「試してみるまでは男を決して称えるな／試しもせずに彼を咎めるな」に続く文言として引用され，ウマイヤ朝期の詩人ナービガ・シャイバーニーの詩句と紹介されることがあるが［*Dīwān Nābiġa/ʻĀlam al-Adab*: https://i0.wp.com/adabworld.com/wp-content/uploads/2021/07/adabworld-poetry-quotes-4126.jpg?fit=1600%2C1600&ssl=1（最終閲覧日：2022年3月8日）］，ナービガ・シャイバーニーによる当該の詩には「試してみるまでは男を決して称えるな／試しもせずに彼を咎めるな」の後に「奴隷は躾けてくれた者に従う」という異なる文言が続く［*Dīwān Nābiġa/Dār al-Kutub al-Miṣrīya*: 75］。ルイス・シェイホーは「試してみるまでは」から「男とは」までの文言をシャブラーウィー（1681年没）の文言として引用しているが，ウマリーよりも後代のシャブラーウィーの創作ではありえない［Šayḫū 1913, v. 1: 18］。

62）最後の審判で人の行いを秤にかける光景を踏まえた表現。

63）『クルアーン』20章69節を基にした表現。この箇所は預言者モーセと妖術使いの術比べの記述で，「杖や縄から」の語句はこの節にはないが，同じ話題を扱った26章44－45節に妖術使いが「縄や杖」を投げつけて蛇に変えたという記述がある。前掲注39，40も参照のこと。

64）投石機が発射しているさまを示した表現であろう。

65）「アーチ橋」ʻaqd に同綴の言葉「首飾り」ʻiqd を掛けて，橋を壊すことを「繋ぎを解き」という文言で表している。

ズィヤール（架台付き弩）[66]

彼はズィヤールを引き絞った。それは，正に〔敵を〕貫く奇蹟[67]と大地を踏みしめる脚の持ち主であり，要塞の首を締め上げる手を持つ。〔ms. 132b〕それは，泡吹く雄ラクダ（fanīq）のごとく唸りをあげる[68]。ズィヤールは，その働きでもって投石機と優劣を競う。投石機は言う，「これは，私にはできない技である」。

防御柵[69]

かの覆い隠されし都城は，〔市壁とは〕別の壁である防御柵で自らを隠し，その防御柵という腕輪で自らを飾った。〔敵の〕目は，朝になってこれに驚いた。その後には，かの防御柵の覆いの向こう側からでしか都城が見えなくなった。そして防御柵によって，その内側にあるものは，秘密の中身が知られるがごとき〔方法〕でなければ知られることがなくなった。防御柵は，その矢が投石機の〔発射する〕矢でない限り，矢の標的となって立ちはだかった。また，降り注ぐ全て〔の矢〕を熱烈に愛しながら立ちはだかった[70]。その矢は，美しい都城の風景を見ることがない。〔txt. 306〕

都城の中にいる者は，欺いて防御柵の後ろにとどまった。彼の意図は，戦うものと思わせながら，彼自身を守ることである。

ヒタイの矢[71]

真っ直ぐに飛ぶヒタイの矢が〔的を〕外すことはなく，その矢の攻撃はひとつの村も逃さず破壊する。その胸中は既に怒りで満ちており，火の翼をもつその矢は数多く征服した。矢の軌道は逸らされることがなく，ヒタイの矢という轟く雷鳴と稲妻のみが，敵を恐慌させ，炎上させる。

66） al-ziyārāt. qaws al-ziyār とも表記される。巻き上げ機や歯車を用いた大型の弩で，架台に据え付けられて運用され，その発射には複数の人員が必要であった［アルハサンほか 1999: 137－138頁 ; Hillenbrand 1999: 457, 526; “Ḳaws,” EI2］。宋代の中国に，発射台（牀）に弩を据え付けて運用する牀弩（あるいは牀子弩）なる類似の兵器が存在していたことを付言しておく［杭侃2006: 45－46頁］。

67） mu‘ǧiza ḫāriqa. ḫāriqa は，ズィヤール（弩）という武器の性質から「貫く」という意味で訳出しているが，amr ḫāriq li-l-‘āda（自然の慣習を破る出来事）という言い回しで mu‘ǧiza（奇蹟）を定義する際に使用される言葉でもある［*Lane*: 729］。

68） Lane によれば，「泡吹く」と訳した azbada は，唸り声をあげるラクダ（a braying camel）の口が泡立つ様を表現する動詞である［*Lane*: 1209］。

69） al-satā’ir. 単数形は sitāra である。訳注（４）*44*頁にも言及がある。ベイルート版［272頁注２］によれば，城壁や船上で身を隠すために用いられる盾（ṭāriqa）。Nicolle や Rehatsek は，これを柵（palisade）と訳出している［Nicolle 1982, v.1: 165; Rehatsek 1878-1880: 239-240］。

70） 降り注ぐ矢を防御柵が漏らさず受け止めることを表現しているのであろう。

71） al-sihām al-ḫiṭā’īya. 単数形は al-sahm al-ḫiṭā’ī である。ギリシア火を発射する手法のひとつに，中国式に，ギリシア火を入れた容器（cartridge）を矢に固定して発射する手法，sihām ḫiṭā’īya がある［“Bārūd,” EI2］。火箭と呼ばれる中国の兵器に該当するか。火箭については，杭侃2006: 42－44頁を参照のこと。

弩砲[72]

弩砲のクフル[73]がいかに多くの町の目を失明させたことか。弩砲という雄ラクダ（faḥl）がいかに多くの肥えた雌ラクダ[74]を妊娠させたことか。その雌ラクダの中にいかに多くの火の精液を放出したことか。その中には，胎児〔たる火種〕が含まれている。雌ラクダを燃やすこの火は，恥辱〔を受ける〕よりもささいなものであった。

弩砲は，自らの秘密を敵に打ち明けた時には，〔敵は倒れているので〕敵を気にかけることはない。弩砲という災いに隠れしものを連中（qawm）に披露した時には，〔敵を〕恐れることもない。弩砲は，城塞に「焚火で燃える火」［クルアーン：85章５節］を送り届け，その砲弾（bunduq）で[75]胸壁（šurfa）の頭部を打ち砕き，〔ms. 133a〕アーチ橋の脚部を破壊する。いかに多くの砲弾が都城を急襲して飛び込んだことか。弩砲という反逆の悪魔[76]は，彼にとっては石打[77]に値する火炎を発射した。〔txt. 307〕

火炎瓶[78]

その火炎瓶は彼らにぶつかり，かのクルクーラ船[79]〔を想起させ，そ〕の情報が彼らの思考の海を巡った。城塞は火炎瓶という災難を投げつけられた。その災難は城塞を根こそぎにし，逃げ道（ḏarī‘a）を塞いでしまう。そのとき，火炎瓶〔の火〕はかの塔の中を駆け上り，かの城塞（‘aqīla）の縄にぶら下がった[80]。やがて，火炎瓶〔の火〕の赤い旗が城塞に広がり，

72）makāḥil al-bārūd. 単数形は mukḥulat al-bārūd である。直訳すれば，火薬（あるいは硝石）の容器。研究篇285頁はこれを大砲（cannons）としており，また mukḥula は単独でも大砲等の銃器を意味しうるが，Ayalon はウマリーの著述がマムルーク朝における銃器（firearms）の利用が確実視される時代（1360年代の半ば）よりも早期であることから，これを銃器と断定していない［“Bārūd,” EI2］。*Dozy* によれば，mukḥula は，石やギリシア火を射出するバリスタやカタパルトの一種をも意味する［*Dozy*, v. 2: 455-456］。

73）mukḥula の原義が「クフルの容器」であるので，弩砲に使用される火薬（あるいは硝石）をクフルに例えて表現しているものと考えられる。なお，クフルとはアイシャドーや眼病の薬として利用された硫化アンチモンの粉末［訳注（８）：*34*頁注69］。

74）badana. 都城の比喩か。幕壁（badan）と掛けた表現とも考えられる。

75）「その砲弾で」と訳した箇所は，校訂テキストでは banādiq-hā となっており，「で」に相当する前置詞を欠いているが，誤植であろう。ベイルート版［273頁］および諸写本に従って bi-banādiqi-hā と読む。

76）šayṭān-hā al-marīd.『クルアーン』37章７節に類似する表現が見られる。

77）rağm.『クルアーン』67章５節において，rağm は悪魔に対する攻撃手段とされている。

78）qawārīr al-nafṭ. Ayalon は，これを「中に石油が入っていて敵に投擲される，粘土などでできた容器」と紹介する［Ayalon 1978: 16］。なお，qawārīr は本来「長首の瓶」を意味する qārūra の複数形である。Nicole は，単数形の qārūra を「火炎壺（fire-pot）」または「手榴弾（grenade）」と訳す［Nicole 1982: 157, 413, 415］。本訳注では，qawārīr al-nafṭ に対して一般的によく用いられる「火炎瓶」という訳語を当てる。

79）qurqūra. 元々ナイル川での運搬に用いられた小型の船を指すギリシア語 kerkūros に由来し，やがて大量の積み荷を運搬することが可能な大型の船舶に対する名称として用いられるようになった。地中海ではムスリムもキリスト教徒も共に広くこの船を利用したとされる［Agius 2008: 332-334］。

80）‘aqīla は本来「妻」や「婦人」，「最良の女性」（または「最良のラクダ」）を意味する単語であるが，ここでは二重の意味を持たせて「城塞」の比喩として使用されている。なお，本訳注ではこの後に出てくる ḥabl をそのまま「縄」と訳しているが，‘aqīla を「妻」ととった場合，この単語も同様に二重の意味を有していると考え，「〔婚姻の〕絆」の意と解釈することも可能である。

災禍（ḍarrā’）が火薬の結び付けられたサソリ[81]が這うように進んだ。燃え盛る火がついて，火炎瓶の〔火によって生まれる〕木が枝を伸ばした。また，それはバラとなって咲いたが，このバラは萎れてもなお赤い。

81） ‘aqārib al-bārūd al-muṣarrara. *Dozy* は最後の単語を同語根の別の単語に置き換えた “‘aqārib al-bārūd al-maṣrūra” として項を立て，これが「ロケットの一種」を指す，と説明している［*Dozy*, v. 2: 152］。しかし，そこで典拠として挙げられている史料の記述は断片的で極めて曖昧なものであり，この記述のみに基づいて当該語句を特定の武器を指す名称とみなすことは難しい。そのため，本訳注ではこれを普通名詞として訳出するにとどめる。

参考文献および略称

『高貴なる用語の解説』活字本

al-‘Umarī, Šihāb al-Dīn Aḥmad b. Yaḥyā b. Faḍl Allāh. *al-Ta‘rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf*.（『高貴なる用語』）

校訂：*al-Ta‘rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf l-Ibn Faḍl Allāh al-‘Umarī*.（Vol. 2 of *A Critical Edition of and Study on Ibn Faḍl Allāh’s Manual of Secretaryship “al-Ta‘rīf bi’l-muṣṭalaḥ al-sharīf.”*）Ed. Samir al-Droubi. al-Karak: Mu‘ta University, 1992.

ベイルート版：*al-Ta‘rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf*. Ed. Muḥammad Ḥusayn Šams al-Dīn. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya, 1988.

『高貴なる用語の解説』写本

B: Ms. 8639. Deutsche Staatsbibliothek, Berlin.

D1: Ms. Adab 57. Dār al-Kutub al-Miṣrīya, al-Qāhira.

D2: Ms. Adab 2134. Dār al-Kutub al-Miṣrīya, al-Qāhira.

F: Ms. Arabe 5872. Bibliothèque Nationale, Paris.

L: Ms. 659. Karl Marx Universität, Leipzig.（底本）

Ld: Ms. Or. 352. Universiteit Leiden, Leiden.

S1: Ms. Árabe 1639. Real Biblioteca del Monasterio, Escorial.

S2: Ms. Árabe 1640. Real Biblioteca del Monasterio, Escorial.

Sh: Ms. Add. 7466 Rich. British Library, London.

『高貴なる用語の解説』訳注

訳注（1）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（1）」『史窓』67号（2010年）：*27－65*頁.

訳注（2）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（2）」『史窓』68号（2011年）：*51－94*頁.

訳注（3）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（3）」『史窓』69号（2012年）：*19－53*頁.

訳注（4）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（4）」『史窓』70号（2013年）：*31－49*頁.

訳注（5）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（5）」『史窓』71号（2014年）：*1－24*頁.

訳注（6）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（6）」『史窓』72号（2015年）：*63－79*頁.

訳注（7）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（7）」『史窓』74号（2017年）：*1－25*頁.

訳注（8）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（8）」『史窓』75号（2018年）：*23－44*頁.

訳注（9）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（9）」『史窓』76号（2019年）：*21－51*頁.

訳注（10）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（10）」『史窓』77号（2020年）：*25－45*頁.

訳注（11）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（11）」『史窓』78号（2021年）：*115－145*頁.

訳注（12）：谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（12）」『史窓』79号（2022年）：*21－50*頁.

辞典類

Dozy: Dozy, Reinhart Pieter Anne. *Supplément aux dictionnaires arabes*. 2vols. Leyde: E. J. Brill, 1881. Beyrouth: Librairie du Liban, 1981.

EI2: Gibb, Hamilton Alexander Rosskeen, et al., eds. *Encyclopaedia of Islam*. New edition. 12vols. and index volume. Leiden: Brill, 1960-2009.

Lane: Lane, Edward William. *Arabic-English Lexicon*. 8vols. London, 1863-1893. Revised ed. 2vols. 1984. Cambridge: The Islamic Texts Society, 2003.

史料・史料訳注

クルアーン（井筒訳）：『コーラン』井筒俊彦訳，改版．全３冊，岩波書店〈岩波文庫〉，1964年．

クルアーン（中田ほか訳）：『日亜対訳クルアーン』中田香織・下村佳州紀訳，中田考監修，作品社，2014年.

クルアーン（藤本ほか訳）：『コーラン』藤本勝次ほか訳．全２冊，中央公論新社〈中公クラシックス〉，2002年.

クルアーン（三田訳）：『日亜対訳・注解 聖クルアーン』［三田了一訳］，改訂版，日本ムスリム協会，1982年.

聖書：『聖書――新共同訳―旧約聖書続編つき――』共同訳聖書実行委員会［訳］．日本聖書協会，1987年.

Bayān: al-Ǧāḥiz, Abū ʻUṯmān ʻAmr b. Baḥl. *al-Bayān wa al-tabīyīn*. Ed. ʻAbd al-Salām Muḥammad Hārūn. 4 vols. Bayrūt: Dār al-Ǧīl, n. d.

Dīwān Abī Tammām: Abū Tammām, Ḥabīb b. Aws al-Ṭāʼī. *Dīwān Abī Tammām bi-šarḥ al-Ḫaṭīb al-Tibrīzī*. Ed. Muḥammad ʻAbduh ʻAzzām. 4 vols. al-Qāhira: Dār al-Maʻārif, 1982-1987.

Dīwān Nābiġa/ʻĀlam al-Adab: al-Nābiġa al-Šaybānī. “Dīwān al-Nābiġa al-Šaybānī.” Ed. Muǧtamaʻ ʻĀlam al-Adab. ʻĀlam al-adab. 2022. < https://adabworld.com/>

Dīwān Nābiġa/Dār al-Kutub al-Miṣrīya: Nābiġat Banī Šaybān, *Dīwān Nābiġat Banī Šaybān*. al-Qāhira: Dār al-Kutub al-Miṣrīya, 1932.

Ǧāmiʻ al-tawārīḫ/Quatremère: Rašīd al-Dīn Faḍl Allāh Hamadānī. *Ǧāmiʻ al-tawārīḫ*（*Histoire des Mongols de la Perse*.）Ed. and trans. Étienne Quatremère. Vol. 1. Paris: Imprimerie Royale, 1836.

Ṣubḥ: al-Qalqašandī, Šihāb al-Dīn Aḥmad b. ʻAlī. *Ṣubḥ al-aʻšā fī ṣināʻat al-inšāʼ*. 14 vols. al-Qāhira, 1913-1920. al-Qāhira: Wizārat al-Ṯaqāfa wa al-Iršād al-Qawmī, 1963.

Tafsīr al-Ǧalālayn: Ǧalāl al-Dīn Muḥammad b. Aḥmad al-Maḥallī and Ǧalāl al-Dīn ʻAbd Allāh b. Abī Bakr al-Suyūṭī, *Tafsīr al-Ǧalālayn al-muyassar*. Ed. Faḫr al-Dīn Qabāwa. Bayrūt: Maktabat Lubnān Nāširūn, 2003.

研究

アルハサン，アフマド Y.・ヒル，ドナルド R.『イスラム技術の歴史』多田博一・原隆一・斎藤美津子訳，平凡社，1999年.

杭侃『宋――成熟する文明』（図説中国文明史7）劉煒編，稲畑耕一郎監修，大森信徳訳，創元社，2006年.

Agius, Dionisius A. *Classic Ships of Islam: From Mesopotamia to the Indian Ocean*. Leiden: Brill, 2008.

Ayalon, David. *Gunpowder and Firearms in the Mamluk Kingdom: A Challenge to a Mediaeval Society*. 2nd ed. London: F. Cass, 1978.

Dozy, Reinhart Pieter Anne. *Dictionnaire détaillé des noms des vêtements chez les Arabes*. Amsterdam: Jean Müller, 1845.

al-Droubi, Samir. *A Critical Edition of and Study on Ibn Faḍl Allāh's Manual of Secretaryship*

"al-Ta'rīf bi'l-muṣṭalaḥ al-sharīf." 2vols. al-Karak: Mu'ta University, 1992.（『高貴なる用語』のテキストが収められている第２巻は「校訂」，作品研究が収められている第１巻は「研究篇」と略称。）

Hillenbrand, Carole. *The Crusades: Islamic Perspectives*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 1999.

Nicolle, David. *The Military Technology of Classical Islam*. 3vols. Diss. The University of Edinburgh, 1982.

Rehatsek, Edward. "Notes on Some Old Arms and Instruments of War, Chiefly among the Arabs," *Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society* 16（1878-1880）: 219-263.

Šayḫū, Luwīs. *Kitāb Maǧānī al-adab fī ḥadā'iq al-'arab*. 6vols. Bayrūt: Maṭba'at al-Yasū'iyīn, 1913.

Stillman, Yedida Kalfon. *Arab Dress: From the Dawn of Islam to Modern Times*. Leiden et al.: Brill, 2000.